考古学研究所アルカ提供

Archaeological Laboratory,Co.,Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.250
2024.7.1

＊考古学研究所（株）アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器 ―『日本先史土器図譜』と現在―

鈴木 正博

● 第58回 ●「加曾利B1式」原論と道統

山内清男の『図譜』「B1式」は、遺蹟別層位別の文様帯標本を選定した上で、更に伴存関係にある標本も加えられて全体の構成が組み立てられ、「土器型式」として制定されている。その認識に立つならば、『図譜』「B1式」制定の個別・全体からは如何なる学びが得られるであろうか。

第一は『図譜』「B1式」標本群**個別**の形態や装飾等の吟味から「土器型式」としての特徴を総体的に見出す学びである。

第二に比較的多い標本群**全体の図版配列**の意味を考え、「土器型式」制定の方法とはどうあるべきか、等原理を見出す高度な学びである。即ち、如何なる目的に従い図版配列の順序が決定され、どのような手続きを経てアッセンブリジされたか、と云う形態学から型式学を含む深層に赴く。

即ち、これまで触れた『図譜』「B1式」の議論には、遺蹟別層位別の一括性に加え、**「土器型式」制定アルゴリズム**として**形態学による器種別文様帯別再編**、及び**型式学による文様帯別新旧順序関係の再構成**、が彷彿とするのであり、その手続きを分かり易く示すならば次の手順となる。

【1】複数遺蹟別（層位別）標本の選定
【2】選定標本の集合と初期化（遺蹟からの解放）
【3】器種別分類
【4】器種別文様帯の導出
【5】器種別文様帯から器種別「範型」の導出
【6】器種別「範型」の「文様帯シーケンス」（新旧順序関係となる**「縦の構造」**）**導出**
【7】器種別「範型」の「文様帯シーケンス」から同一文様帯の器種別集合による「型式組成」導出
【8】「文様帯シーケンス」に属さない「文様帯ブランチ」（異質な文様帯関係となる**「横の構造」**）**と「型式組成」の統合による「文様帯インダストリ」の構築**
【9】「文様帯インダストリ」と他の層位的伴存標本との総合による器種別適宜配列

畢竟、『図譜』「B1式」は幾つかの遺蹟の層位から選定された学史的個別標本を用いるだけに止まらず、【1】～【9】の「土器型式」制定アルゴリズムも包括される等、正に**「加曾利B1式」原論**（以下、**「原論」**と略）と呼ぶに相応しいであろう。

「原論」の内包は**「土器型式」概念**にあり、『日本遠古之文化』（1932）で「土器型式」に共通する**「地方差、年代差を示す年代学的の単位」**観に論理基盤を見出し、「土器型式」制定アルゴリズムが**「原論」の外延**を具体的に構成する。

日本先史考古学の体系化は、山内清男の主要二著である**『日本遠古之文化』**に始まり**『日本先史土器図譜』**までの多くの著作活動により科学的思考の展開と共に成し遂げられ、日本先史文化解明の論理基盤である「土器型式」の役割が明確に位置付けられると、当然ながら**「土器型式とは何か?」**との根源的な命題と向き合うことになる。この命題は学問としての確立を求めており、**「土器型式」概念の内包と外延が理論的に構築され事象が体系的に秩序立てられなければならない。**

「土器型式」概念の内包は『日本遠古之文化』により明確に示され、**外延は『日本遠古之文化』と「縄紋土器型式の細別と大別」（1937）、及び『日本先史土器図譜』**により体系的かつ実態化を伴い整備される等、この主要二著までに**日本先史考古学は理論的な概念による編年学構築法、及び日本先史文化解明への接近法の両者を確立した。**

敗戦後の復興と高度経済成長による国土開発の進展は、全国各地で発掘調査が隆盛化すると共に、それに呼応するかの如く**縄紋式土器の未明であった外延も縦横の膨大なピース群がより細かく豊富に蓄積**され、大幅な見直し機運が乗じた。加曾利B式土器も外延となる標本に大量適用が企図され、**「原論」の再検証**が進展すると共に、**より緻密な分析に耐えうる関係概念の創出や導入も必然化**する。例えば**文献（1980c）**では**「原論」の同時性を課題とすると共に集団交流を通した「土器社会論」の構築**を目指すが、この成立には**「土器型式」が担保する同型との共通性が前提**となる。**「土器型式」は土器の個性（製作・使用・廃棄）である人間を捨象することで成立する概念**である。**個性の違いと同型との共通性の狭間で揺れる「考古哲学」の振り子から提起される問題の重要性**は、『日本先史土器図譜』の領域から外れるのでここでは触れないが、個性の違いを同型との共通性へと昇華する手続きとして**文様帯による立論の重要性**は欠かせない。

こうして現在までの年代的変遷と地方的変容の新たな「細別」による編年（**文献（1980b・1981）**）を外延として再認識すれば、**『図譜』「B1式」から続く系統的年代的な変化は極めて滑らかかつ接続的**であり、特に**「B1e式」との界線が注目**される（**文献（1986）**）。即ち、前回触れた**「福田型鉢」**（第56図右の**図版21**参照）へ再着目するならば、「原論」の再検証も踏まえた上で「文様帯シーケンス」とは生成過程を異にする**「文様帯ブランチ」**の役割として位置付けられる（**文献（2002a）**）。

畢竟、**「原論」に見出す滑らかかつ連続的な変遷の意義も今日的「細別」と再認識**するならば、**山内清男が敢えて分断を以て制定した「加曾利B式（中位の古さ）」、改め「加曾利B2式」には「並行線化された磨消縄紋の名残」**こそ見られても、**「B1式」の「平行線的な磨消縄紋」による「横帯磨消縄紋」は殆ど見当たらない。**この重大な分断を解消すべく「B1式」からの**「道統」**を企図し、**「横帯磨消縄紋」と続き具合の良い「B1式」に続く「細別」の発見に課題を見出すならば、「加曾利B1-2式」（文献（1980b・1981・1984・1986・1999a・b・2003・2009））**へ逢着する。同時に粗製土器様式に観る**「二尖の棒端を引擦って付けた条線」**が精製土器様式に与える強力な影響や「半精製土器様式」の地域的役割も見据えなければならない。

※巻頭連載は隔月です。次回は大村裕さんです。

目　次

■加曾利B式土器　「加曾利B1式」原論と道統（第58回）　鈴木正博 …1
■考古学の履歴書　私の考古遍歴（第10回）　工楽善通 …2
■リレーエッセイ　マイ・フェイバレット・サイト（第242回）　山本翔麻 …3
■考古学者の書棚　『古代の藤沢 考古遺跡を中心に』　横川稜平 …4

考 古学の履歴書

私の考古遍歴（第10回）

工楽 善通

先に記した群馬県日高遺跡での発掘以後、1970年代後半には高崎市を中心として、同道・御布呂遺跡などで相継いで水田遺構が発掘されるようになった。これらはどれも浅間山又は榛名山起源の火山灰降下によって埋没した遺構だから、西日本では水田遺構の検出は望めないだろうと思っていた。ところが各地の研究者の努力によって、洪水砂や河川氾濫の堆積層下の微細な観察によって、滋賀県服部・岡山百間川・福岡板付遺跡等でも水田遺構が発掘されるようになり、年を追うごとにその数は増えていった。1980年代には平野部で遺跡を発掘する際には、どこでも埋没した水田の存在を念頭におく必要があることが常識となり、水田を見つけることがむしろあたりまえのようになってきた。私は稲作の根源である耕地の遺跡に大変興味を抱き、各地へ足を運び、また、現場からも声をかけられて実地に多くを学ぶことができた。

1957年からは「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究」、のちに「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」という名のもとに文部省から研究費の補助が認められ、それに応募して植物学や土壌学などの研究者と共に交流し、研究を進めることができた。また1982年には「日本文化財科学会」が発足して、考古学と自然科学との結びつきがより一層活発化して、出土品の材質分析や産地同定など、さまざまな分野で成果を上げていった。このような時、私達はプラント・オパール分析の開発者である藤原宏志氏、花粉分析の中村純氏、育種学の笠原安夫氏、灰像法の松谷暁子氏らと組んで、青森県田舎館村垂柳遺跡において、県教育委員会の調査に協力して弥生時代の水田遺構検出に挑んだ。この目的は伊東信雄東北大教授が40年も前に、東北地方各地の弥生時代遺跡から炭化米が出土することから、続縄文時代ではなく、東北北部まで稲作農耕が浸透していたのだと主張されていたことを実証するためであった。1981年秋にはみぞれ降るなか、少範囲だが畦で区画された水田跡が検出され、翌年には国道バイパス建設予定地で、広範囲にわたって656面の小区画水田が発掘された。これはまぎれもない弥生時代中期の水田で、仙台から見学にかけつけた伊東先生も大喜びであった。そのずっと後、1987年5月刊の『季刊考古学』第19号・特集「弥生土器は語る」誌の表紙に、伊東先生の前に田舎館式土器を据えた場面を掲げた。写真撮影の労を須藤隆さんに頼んだら、こんな真面目な写真になってしまった。後日先生から「写真は無事終わりました。あとは須藤君の腕に期待するのみ。独眼竜政宗がはじまって、仙台は政宗ブームです」と記した葉書をいただいた。その1ヶ月後、先生は肺炎のため亡くなられた。ほんとうに驚きであった。

垂柳遺跡の調査中もう一つ大きな成果があった。ある晩、函館市立博物館長の千代肇氏が宿舎に来訪され、「青森でこんな土器が出ているのだが、これは何んか西日本と結びつくものではないですか」と言って小さな写真を見せられた。え！　これが青森でとびっくりした。聞くと、八戸市近くの松石橋からの出土品で、運よく'82年秋に、県立郷土館での弥生稲作の展覧会で展示されることになり、開館時間外に手に取って観察させてもらった。それはほぼ完形の大きな壷で、形や表面の調整具合、胎土や色調などが西日本で見られる遠賀川式土器そっくりで、そのうえ土器表面に編み籠の痕跡が所々黒く残っている。私は直ちにこの壷は、京都で過ごされたことのある千代氏の言われる通り、西日本の強い影響下で製作された土器であることに間違いないと判断して、そのことを周囲の人々に伝えると共に、その出土地の追求と東北で類似する土器の探索の必要性を説いた。

その後県立郷土館が多くの研究者の意見を聞くため、その土器を関西へ持参することになり、佐原さんから連絡してその日に合わせて小林行雄先生も奈文研へお越しになり、所長応接室でじっくり観察された。そしてこれは紛れもなく遠賀川式系統の土器であり、どうしてこんなものが青森で出土するのか話し合った。その後東北各地で地元の研究者が、このような異質の土器に着目して探索しはじめると、福島県以北の各県でも、既に出土していることがわかってきた。1986年秋には八戸市で日本考古学協会の大会が開催され、これら各地の土器群が市立博物館で展示されて見ごたえがあった。先に記した『季刊考古学』第19号のカラー頁見開きに、山口県から青森県にわたる遠賀川系統の土器が、2000年ぶりにずらりとそろった写真は見事である。

最北の水田跡が青森で見つかった頃、佐賀では唐津市でわが国最古の水田が発見されて大きな話題を呼んだ。このことで弥生時代前期の前に早期という名が設定されるようになった。この発掘の終盤の頃、我々の間でも現場を見ようということになり、坪井、町田、私のほか京都からも小林先生、原口正三、都出比呂志氏が参加した。現場見学の後、事務所で出土した土器を見せてもらい議論百出であった。夜は博多中洲にて九大から岡崎敬、横山浩一氏、また森貞次郎氏も出席して、さらに県教委からも藤井功氏ら数名が参加して楽しい会となった。

日本で小区画の水田が発掘され始めた頃、京都大学東南アジア研究センター教授の高谷好一氏が「ふたつの小区画水田」というレポートを『季刊民族学』誌に発表され、スマトラ島と日本の水田区画を比較し、水田研究者も触発された。そして同氏を代表する科研費「古代稲作農耕の学際的研究」が採拓され、東南アジア研所長の渡部忠世氏も主力メンバーで、他に古川久雄教授らが加わり、京大から地理学の金田章裕教授も入って、広くアジア一円のなかで稲作の起源や伝播を考えるようになった。東日本で発掘されている水田遺跡の何カ所かを、実地に見学し回る機会を持ち、それには京都国立博物館長の上山春平氏も同行され、正に学際的な議論が出来たと思う。この研究の成果の一つに『水田遺構集成』の刊行があり、奈文研の『埋蔵文化財ニュース』62号として作成し、同時に京都の「農耕文化研究振興会」からも刊行され販売された。

略　歴

1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
〃	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同　大学院修士課程修了
〃	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈文研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈文研飛鳥資料館　学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職
〃	(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所勤務
2001年～2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本暉久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 242

伊勢市の歴史と丁塚古墳の変遷 ～三重県伊勢市

山本　翔麻

伊勢市西豊浜町に位置する丁塚古墳は、宮川水系外城田川下流左岸の標高2メートルほどの段丘上に立地する。丁塚古墳から南に、宮川を渡り、4キロほど進むと伊勢神宮外宮が鎮座する。西豊浜町は、古代伊蘇郷の周辺部と考えられ、伊蘇郷は、伊勢神宮外宮神官を世襲した度会氏を輩出した磯部氏の本拠地であったと考えられており、丁塚古墳およびその周辺の消滅墳の被葬者を考える上で注目すべき点である。また、『太神宮諸雑事記』という伊勢神宮の神官が平安時代末期に編纂した史料には、神宮の大神宮司を世襲した大中臣氏の「館」が所在した地でもある。このように伊勢神宮との結び付きが強い周辺環境に丁塚古墳が所在していることがわかる。

墳丘は、直径29m、高さ4mほどの円墳で、市内では外宮宮域の高倉山古墳山頂に位置する高倉山古墳（直径35m以上、高さ約7.5m）に続き2位の規模を有する。埴輪や葺石は未確認であるが、明治期に天井石と考えられる大きな平石の存在が記録されており、横穴式石室を有する可能性がある。時代は、皇學館大学考古学研究会の分布調査により、採集された須恵器片から5世紀末頃と考えられる。周辺には丁塚古墳以外の古墳があった記録があり、8基以上の古墳が存在する古墳群を形成していた。残念ながら調査されることなく、丁塚古墳以外の古墳は、耕地整備に伴い、戦後すぐに完全消滅している。唯一残された丁塚古墳は、所在地の西豊浜町森区のシンボルとして、地域住民から今も大切にされている。丁塚古墳はなぜ消滅を免れ、今も続く地域住民から庇護される対象となり得たのか。その秘密は丁塚古墳の独特な変遷が深く関係している。

さて、丁塚古墳は3つの「塚」で構成される複合遺跡でもある。1つ目の塚は、前述したとおり古墳としての塚である。では2つ目、3つ目の塚は、墳丘部への追葬かというとそうではない。そこに丁塚古墳の特徴的な変遷を垣間見ることができる。

壬申の乱で勝利した大海人皇子が天武天皇として即位すると、伊勢神宮への庇護を強め、次の持統天皇の時代から伊勢神宮の御社殿や御神宝を20年に一度造り替える、式年遷宮が始まる。こうした影響もあり、伊勢神宮の周辺部に斎宮や離宮院といった官衙が整備され、また力を持った神宮神官たちの居館が主に宮川の流域の河岸段丘上に築かれた。奈良時代には聖武天皇の東大寺大仏造立の詔に端を発する仏教により鎮護国家体制が形成されていく。伊勢神宮においても例外ではなく、「太神宮寺」が造営されるなど伊勢神宮周辺は、都で成立した最新の祭祀スタイルを積極的に取り入れた。その結果、平安時代には神宮神官たちが神宮周辺に自らのプライベート寺院である氏寺を多数建立することとなる。そうした寺院と合わせて造営されたのが、「経塚」である。市内には国史跡である朝熊山経塚群をはじめ、小町塚経塚、蓮台寺滝ノ口経塚など多くの経塚が集中している。丁塚古墳における2つ目の塚は、経塚である。地域住民が墳頂部の杉が枯れ始めたため、若杉に植え替えるために掘削したところ、高さ20cmほどの経筒（外容器の可能性もあり）が出土した。残念ながら原物は所在不明となっており、残された写真から推察するに、蓮台寺滝ノ口経塚出土の経筒と同様に渥美半島で焼かれたものと考えられる。伊蘇郷周辺を拠点とした磯部氏の末裔の度会氏、また当地に居館を構えたことが記録されている大中臣氏が経塚造営に関与したことは想像に難くない。

中世になると、律令国家体制のもとで運営されてきた伊勢神宮は大きな転換点を迎えることになる。神宮神官たちは自らの繁栄、生存のため神宮の領地である神宮領の獲得に積極的に働くとともに「伊勢信仰」の布教に務めた。主にこうした活動を行った神宮神官は権禰宜層の神官で、「伊勢御師（おんし）」と呼ばれた。こうして伊勢神宮は日本各地に神宮領を持ち、またその先の住民たちと檀家関係を結ぶことで、近世以降に発達する「伊勢参宮」の礎を築いた。伊勢信仰の布教に伴う経済活動も盛んに行われ、特に外宮鳥居前町の山田、内宮の鳥居前町の宇治は町場として発達していった。町場が発達すれば人口は増え、人口が増えると、当然多くの墓所も必要となる。丁塚古墳の3つ目の塚（墓）は、室町時代末頃以降に墳丘に並べられるようになった墓石群である。その数は300基を超える。墓石は基本的に参り墓と考えられており、実際の埋葬はされていないとの見方が強い。現在でも丁塚古墳の墳頂にある地蔵像は信仰の対象となっており、榊が供えられている。

このように丁塚古墳は、伊勢神宮周辺の類まれな歴史的流れを汲みつつ、姿を変えてきた複合遺跡なのである。また、墓石への信仰の他、古老から聞いた話では「丁塚に登ると腹痛に見舞われるため登ってはいけない」といった民間伝承があることも確認できた。古墳は確かに古墳時代に築かれたお墓であるが、こうしたその地域の歴史の中で独特の変遷をたどり、まちのシンボルとして今も存在し続けている丁塚古墳は、歴史の生き証人であり、民俗風習の伝承者でもあるように思えてならない。

※次回もお楽しみに…。

▲丁塚古墳

▲丁塚古墳　参墓石

▲丁塚古墳　昭和16年写真

考 古学者の書棚

「古代の藤沢 考古遺跡を中心に」

寺田兼方 著／名著出版（1979）

横川 稜平

はじめに

私が考古学・文化財に興味を持ったきっかけは、旅で訪ねた場所にはどんな特徴・文化・歴史があるのかという点に興味を持ったことにある。すると、そのうちに自分が住む場所はどうなのかが気になってくる。そこで、太平洋相模湾沿岸（いわゆる湘南）に住む私が、高校生の頃に読み始めたのが、1979年に出版された寺田兼方氏の著作『古代の藤沢 考古遺跡を中心に』（名著出版）である（以下、本書と記す）。

1. 著者について

まず本書の著者である、寺田兼方先生について記す。

1934年、神奈川県二宮町に生まれる。

1957年、國學院大學文学部史学科卒業。卒業論文『敷石住居址の研究』。湘南学園にて勤務　（1957年～講師、1959年～1995年 専任教諭）。

1959年、國學院大學大学院修士課程（日本史専攻）修了。修士論文『縄文時代に於ける石製利器の研究』。日本考古学協会員となられる。

1960年、藤沢市文化財保護委員（1990年～2007年 委員長）。

1963年、服部清道氏を会長に湘南考古学同好会結成（寺田先生は1963年～副会長、1998年～2024年　会長、2024年～顧問）。

1966年、熱海市史の資料調査に参加される。

1967年、藤沢市史編さん委員に任命される。

1979年、『古代の藤沢 考古遺跡を中心に』（名著出版）出版。

1984年、大庭城址公園内埋蔵文化財発掘調査委員を務められる。

1985年、慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財発掘調査委員を務められる。

1988年、藤沢市埋蔵文化財調査委員を務められる（～1991年）。

1991年、神奈川県考古学会役員となられる（1995年～副会長、1997年～会長、2006年～顧問）。

1994年、かながわ考古学財団評議員を務められる。

1995年、湘南考古学研究所を開設。

1996年、かながわ考古学財団理事を務められる（2008年～2011年 副理事長）。

2002年、コッキング植物園温室遺構保全活用検討委員を務められる。

2011年、かながわ考古学財団顧問となられる。

この他、亀塚古墳（東京都狛江市元和泉）、西富貝塚（神奈川県藤沢市西富）、片瀬宮畑遺跡（藤沢市片瀬）、三殿台遺跡（神奈川県横浜市磯子区岡村）、稲荷台地遺跡（藤沢市本藤沢）、福田遺跡（神奈川県大和市）をはじめ、各地で多数の考古学・文化財の調査・研究をされてきた（継、寺田2014）。

2. 本書の内容・構成

本書の内容は、藤沢市の歴史を、主に考古学的視点から旧石器時代～古墳時代に焦点を当てて述べられている。その構成は、「1. 藤沢の生い立ち」として、世界や日本列島における地質時代や環境・気候に関する記述から始まり、藤沢市周辺の地形・地質的特徴等についても詳細に述べられている。その上で、「2. 最初の住人たち」（旧石器時代）、「3. 狩人の活躍する台地」（縄文時代）、「4. むらの始まり」（弥生時代）、「5. 地方豪族の支配」（古墳時代）と続く。そして寺田先生は、あとがきにて「埋蔵文化財の保存については、何といっても市民全体がその価値を十分に理解して、これを大切にするような気持が広く高まることが望ましい」と述べている。最後に藤沢市内遺跡地名表と藤沢市内考古学関係文献一覧表が掲載されている（寺田1979）。

本書の特徴は、手に取りやすいB6サイズの中に、上記のように世界的な気候・環境の中に藤沢市を位置付けた上で、各時代における市内や周辺の遺跡・遺構・遺物等を、具体的な場所・特徴を交えて、分かりやすく記している点であると考える。これは考古学を学び、調査・研究をする人のみならず、幅広く一般市民にも考古学の成果と地元の文化財への理解を深めてほしいとの寺田先生の想いによるものであろう。

おわりに

本書が出版されてから今年で45年間となる。当然のことながらこの間にも新たな考古学・文化財関連の調査・研究成果が蓄積されている。特に藤沢市民とその周辺の方々は、そうした新たな成果と照らし合わせながら本書を読むことで、地元への理解がより深まるだろう。

寺田先生は、考古学は専門家・研究者だけでなく、幅広い一般市民と共に理解を深めていくべきものであるとの考えを重視されている。例えば、寺田先生が長年率いてこられた湘南考古学同好会は、発掘調査から遺跡・博物館見学、遺跡調査発表会、勉強会などを行っているが、その会員は研究者・学芸員から一般市民と幅広い。素人学生の私もここでたくさんの有識者とお会いし、多くの知識を得ることができた。こうした場を守り続けてこられた寺田先生には感謝が尽きない。お陰様で、私は今では大学院で文化財・考古学を学び、また地元周辺で文化財関連の仕事にも携わっている。

今もなお湘南地域では街の開発が各所で進んでいる。寺田先生が編纂に携わられた藤沢市史編さん委員会　編1970『藤沢市史 1 資料編』（藤沢市）には「開発の足は余りにも速く、調査は後手にまわってしまう。このままでは、遠からず、市内の遺跡はその殆どが消滅し、外観は立派な住宅や工場の林立する都市が生まれても『歴史のない町』になってしまうであろう。」と記されている。これは藤沢市に限らず全世界的に言えることであろう。『古代の藤沢 考古遺跡を中心に』は藤沢市を取り上げているが、他の地域を取り上げる同様の書籍等も存在することと思う。こうした書籍等を幅広い方々が手に取り、様々な地域への理解を深め、過去・現在・未来について考えていくことが大切ではないだろうか。

参考文献：

継実、寺田兼方2014『寺田兼方　略年譜　著作目録』湘南考古学研究所

寺田兼方1979『古代の藤沢　考古遺跡を中心に』名著出版

藤沢市史編さん委員会 編1970『藤沢市史 1 資料編』藤沢市

アルカ通信 No.250

発行日 2024年7月1日
企　画 角張淳一（故人）
発行所 考古学研究所（株）アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL：http://www.aruka.co.jp